

文化財建造物写真ガラス乾板のデジタル・データ化

奈文研では、かつて文化庁建造物課が保管していた文化財建造物の写真ガラス乾板を約32,000枚所有している。

写真は戦前から昭和30年代に撮影されたもので、なかには戦災等で焼失した建物の写真、過去の修理前・修理中の写真など、現在ではみられない姿を撮影したものがあり、これら乾板は高い資料価値をもっている。しかし、乾板は当研究所に移された時点で、すでにガラスが割れたり、膜面の剝離、銀化等、劣化が甚だしかった。現在は空調設備の整った保管庫に保存しているものの、今後とも乾板の劣化を完全にくいとめることは不可能である。

乾板の整理・保管に際しては、台帳の作成と同時に35ミリ撮影をおこなって検索用アルバムを作成した。現段階では、台帳・アルバムを一般には公開していないが、関係機関からの要請があれば、必要な写真の焼き付けを提供している。焼き付けは、ガラス乾板からの密着焼き付けをおこなっているが、ガラスが脆弱なうえに、原板が四ツ切もしくはキャビネサイズと大きく、その作業を慎重におこなっているものの、作業時における破損の危険性が高い。

このような状況のもと、将来的な乾板の劣化、焼き付け作業時の破損を回避するため、さらには、資料の公開を目指して、ガラス乾板のCD-ROM化に着手し、本年度は約700枚の乾板をデータ化した。

画像データの保存形式は、現在広く一般に利用されているTIFF形式とし、原板がすべてモノクロ写真であるところから、モノクログレースケール(解像度は、フォトCDの64ベース相当)が最適と判断した。今後、ハードやソフトが進化しても、データはそのまま利用可能である。

デジタルデータから得られる精度の高い焼き付けは、フィルム出力したものからのプリントである。フィルムを作成することによって、大きなサイズへの引き伸ばしにも対応できる。また、デジタルデータからのプリンター出力についても、プリンターの性能に大きく左右されるが、レーザー露光熱現像転写方式のプリンターを使用すれば、再現域が若干狭いものの、原板からの焼き付けに近い画質が得られる。したがって、今後原板の劣化が

上：乾板からの焼き付け

中：デジタルデータをフィルム出力したものからの焼き付け

下：デジタルデータからのプリンター出力したもの：プリンターはビクトログラフィーを使用
(いずれも1/2縮小)

進んでも、このデータが保存されている限りは半永久的な資料となり得る。今後も、この作業を継続し、データ検索システムにのせたくえて、関係機関には公開をおこなって、資料要求にも応える予定である。

(井上直夫・島田敏男／飛鳥藤原宮跡発掘調査部)